

(城西人文研究第 27 卷)

リアの 3 人の娘たちと王権の行方

小 野 昌

はじめに

シェイクスピアの作品の登場人物は、ことに悲劇の場合は圧倒的に男性が多い。これはこの時代はまだ女優がおらず、少年俳優が女性の役をつとめていたためである。そこで主役の男性に力点が置かれた議論がなされがちになるのだが、ここでは視点を女性に移して『リア王』を読み直してみたい。特にあまり論じられることの少ない、ゴネリルとリーガンに焦点をあてて考えてみたい。

『リア王』の場合、女性の登場人物はわずかにゴネリル、リーガン、コーディリア 3 人だけであり、3 人ともリアの娘である。その意味ではこの劇に登場する女性たちの人間関係は他のシェイクスピアの作品の女性の登場人物と比較してもかなり限定されたものとなっている。

この 3 人の娘たちの母親はどんな人だったのだろうか。そしてこの娘たちをどのようにしつけ、夫であるリアとの関係はどうであったのか。シェイクスピアはそのようなことには一言もふれてはいない。この作品の材源としてもっとも大きな影響をおよぼしたであろうと思われる作品、作者不詳の『リア王年代記』では、リアの口から、最愛の王妃の葬儀が終わり、娘たちの指導をすべて妻に任せていたので、これからどうしてよいのか分らないと嘆く台詞ではじまっている。しかしシェイクスピアはこの妻との関係をすべて採用せず全く無視している。さらにこの材源では、3 人の娘のうちだれもまだ結婚しておらず、リアはコーディリアの結婚相手を自分の望む人物にするためにいわゆる愛情テス

トを行おうとする。しかしシェイクスピアは2人の姉はすでに結婚しており、コーディリアだけが結婚相手が決まっておらず婚約者を待機させており、愛情テストは彼女の結婚相手を決めるためではなく、すでに3分割してある領地を分け与えるためとは言いながら、実際には、単に娘達に追従の甘い言葉を言って欲しいためだけに行うのである。さらに材源では姉のゴネリルとリーガンはコーディリアの才能や美貌そして宮廷での評判にたいしてかなりのコンプレックスを抱いているのだが、そのことも全く無視されている。この劇の女たちの人間関係を、できるだけ父親と娘という関係に限定して、焦点をしぼろうとしていることが窺えるのである。

この劇のもうひとつの特徴と考えられるのが、王権の問題ではないだろうか。シェイクスピアの多くの悲劇や歴史劇は王権をめぐる争いがテーマとなっている。どのようにして王権を手に入れたか、そして失ったかをめぐる権力闘争がその主要なテーマとなっている。いわば男性原理に基づいている劇であると言える。しかし『リア王』はそういう意味では極めて特異な形で劇が始まる。年老いたリアは劇の冒頭から退位を宣言するのだ。3人の娘たちに、領土のみならず、王の実権をも譲り渡してしまおうと言うのである。そして王権を失ったリアが娘の館を交替で訪れてその世話になろうというのである。この劇は王権を娘夫婦に委譲してしまった名目だけの王、彼女たちの父親であるというだけの王が、王の実権を委譲された娘たちにどのように扱われたのかを描いた悲劇であるという観かたも成り立つのではないだろうか。女性が王権を握り、しかもそれが2つに分散された国がどのようになっていったのか、そんな視点でこの劇を考えてみたい。まず王権はどのような形で委譲されたのか、それから検討してみよう。

(1) 王権委譲の儀式である愛情テストの問題と答え

リアはその最初の台詞で、唐突に地図をもって来させ、領土を3つに分け、だれがいちばん父を思っているかそれが知りたいと言う。しかもあらかじめ誰

にどこを与えるかは回答にかかわらず、決めてあるようだ。リアが期待しているのは、甘い追従のことばである。まずゴネリルの答えを見てみよう。

お父様、私がお父様をお慕いする気持ちは、とてもことばでは尽せません、見る喜び、無限の空間、その中を動き回る自由、それ以上、尊いとか、優れているとかそんな言い方では表せません。

このゴネリルの答えに対してコーディリアは「何と言ったらよいのか」という傍白が入り、リアは満足して領地を与える。次のリーガンの答えは、

私は何から何まで姉上と同じ気持ち、
その値打ちも全く遜色なしとっております。
姉上は実に、私の思いをそのまま述べてくれました。
まだ足りない位です。

そしてリアは満足して3分の1の領地を彼女に与える。遂にコーディリアの番がやってくる。

コーディリア 父上、何もございません。(Nothing, my lord.)
リア 何も無い？
コーディリア はい、何も。
リア 無からは何も生まれんぞ。もう一度言ってみろ。
コーディリア 不幸なことに、私には心の内をうまく口に出すことが出来ません。もちろん父上をお慕いしております。
それが私の娘としての務め (bond)、それだけでございます。

この答えでリアの愛情テストに合格するはずはない。言葉による愛情競争のテ

ストで、ゴネリルは自分のリアに対する愛情は言葉では言えないそれ以上のもので、すべての価値を超えているのだと言う。言葉によるテストで、言葉でいえる以上だと言われたら、それに勝つためには何と言ったら良いのであろう。正解はリーガンの答えなのだ。何から何まで姉上とおなじ、それでもまだ足りないくらい。模範解答が出てしまったからには、その次の人はなんと言うべきか。コーディリアの悩みは正にそのことなのだ。言葉がその価値を失ってしまったら、言葉で言えることは何もない (nothing) と言うしかないではないか。しかしこの答えに激怒したリアは、コーディリアに与える予定であった領地を2人の姉に分け与えてしまう。すべてを失ったコーディリアに、求婚者の1人であったバーガンディ公爵は求婚をとりやめるが、もう1人の求婚者であるフランス王は次のように言って彼女を后とするのである。

コーディリア、あなたは貧しくなってこよなく豊かに、見棄てられて
こよなく貴く、蔑まれてこよなくいとしいものになった。

フランス王のこの台詞は彼女に対して一方的に語られるのみで、彼女がフランス王にむかって述べる台詞は一言もない。そればかりかフランス王の出番はここ1幕1場のこの場面だけである。劇の後半で、フランス軍がイギリスにコーディリアを連れて上陸するものの、フランス王は急用のためにフランスに戻ったことが伝えられるだけである。シェイクスピアは彼女を一応結婚させはするが、フランス王の妻として登場させることはせずに、あくまでリアの娘としての側面のみを示めそうとするのである。

フランス王のコーディリアに対するこのコメントは、劇の開始早々から、この劇の持つ重大な意味の1つを言い当てているのかもしれない。年老いた王による気まぐれな、思慮を欠いた愚行によって、彼女是最愛の父親の愛を一瞬のうちに失い、蔑まれ、罵倒され、そればかりか当然与えられるべき領地は姉達に再配分されてしまい、石もて追われる身となるのである。しかしフランス王は、彼女がそのことによって一瞬のうちに、より豊かに、貴く、いとしくなっ

たと言うのである。彼女は一瞬のうちにこの変化を遂げる。しかし彼女はこれ以降、内面の変化や、人間的な成長をうかがい知ることはできないのである。リアをはじめとする他の男性の登場人物たちは、彼らの残りの生涯を通じて、時間をかけながら、ゆっくりと厳しい試練を経て、コーディリアのこの変化を体験することになるのである。

この3姉妹が言葉を交わすのは、リアに二度と顔も見たくないと言われ、退場するとき、フランス王にお姉さま達にご挨拶をとうながされ、

コーディリア　お父様には大事なお宝のお2人に、コーディリアは泣きながらお別れいたします。お姉さまがたのご気性はよく存じております。ただ、妹の身で、その欠点を口にすることは、とても辛うございますので、どうぞお父様をいたわってさしあげて下さいませ。先ほどお見せになった愛情にお父様をお預けいたします。でも、もし、お父様のご寵愛のもとにいられたら、もっと良い所にお連れしますのに。ではお2人とも、ごきげんよう。

リーガン　私たちのことまで指図することはないわ。

ゴネリル　それより、ご主人が満足なさるように努めることね。運命の神様のお慈悲で、拾って頂いたのだから。あなたは従順な心がないのよ。だから、あなたが失ったものも、当然それだけの事があったのよ。

コーディリア　やがて時が、どんな手の混んだ悪たくみも明らかにしてくれるでしょう。隠された悪事も、いつか辱めと、嘲りをうけずにはすみません。ではくれぐれもお大事に。

これが3姉妹が生きて顔をあわせ、言葉を交わす最初で最後の場面なのである。そして劇はコーディリアの言った通りの展開をみせるのである。

1幕1場はこの劇の基本的な枠組みがしっかりと示される場面である。シェ

イクスピアはここで、だれでも知っている、国王と3人の娘にたいする王国分割の民話・神話の枠組みをつかって悲劇を作ろうとしているのである。あくまで神話に忠実に儀式的に行われなければならない。この場面は愛情テストという形式をとった王権の委譲の儀式である。この劇作家が使用したと考えられているいくつかの材源では、王権の委譲にたいして国王は様々な条件をつけているが、この作品においてはリアの100人の騎士の扶養と1月おきに順番に両方の館をおとずれる条件しか示されていない。そこでケント伯が「王権は今までどおりに」と進言するのだが、リアの怒りをさそうだけである。次の2場で、グロスター伯が、「王権はお譲りわたし。扶持を受けてお暮らしになる。」とその異常さを嘆き、道化もまた、リアを阿呆とよび、「ほかの肩書きはみんな譲ってしまったんだから、もって生まれたのはそれだけ」とか「皮だけのサヤエンドウ」とか呼ぶ所以である。

王権を完全に2人の娘夫婦に譲りわたし、王として実権を失ってしまった父親をこの娘たちはどのように扱うのだろうか。リアがあてにしているのは、自分は父親であって、さらに領地はすべて譲ってやったのだからそれなりに扱ってくれるであろうという思いだけである。しかしここであのコーディリアの弁明を思いだしておく必要がある。

お仕えはいたします。親子の絆に従い、それ以上でも以下でもなく。

リアは怒りの余り、人間関係のうちでも、もっとも基本的で強い関係である親子の関係をいとも簡単に断ち切ってしまったのである。彼女が大事にしようとしている親子の絆を。最後の王権の行使は、彼女に対するこの決定を取り消すように求めた、ケント伯の追放のために行使されるのである。

(2) ゴネリルとリーガンのリア追放のプロセス

コーディリアが何もかも失ってフランスに行ってしまったのに対し、ゴネリ

ルとリーガンは妹の分であった領地までも与えられる。さらにリアとの約束であった騎士100人の扶持までも半減しながら減らし、最後にはリア自身までも嵐の荒野に追いやってしまうのである。リアは自分自身が、コーディリアに対して親子の絆を断ち切って、フランスに追いやっておきながら、自分は王であり、父親であり、しかも財産をすべて譲ってやったのだから、親子の絆は切れることはないと信じているのである。しかし彼女達はやはりリアの娘であったのだ。リアがコーディリアにたいして行ったように、2人は緊密に連絡をとりながら、リアの追放に成功するのである。ゴネリルとリーガンの性格的な違いを見出すのはむつかしい。彼女達の行動の違いは、それぞれの夫の性格の違いを反映しているにすぎないように思われるのである。

王の実権は2人の娘夫婦に譲り渡してしまったとはいえ、リアは名目上は王であり、彼の連れている騎士たちの数は、王としてのアイデンティティーのシンボルであるとみなすことができるのである。

何事だ、供の者を50人も減らしたのか半月もしないうちに。

怒りにふるえ、もう1人の娘、リーガンの所へ行くと退場するリア。オールバニー公はこの間の事情を妻から知らされていない。

あなたの乳臭い、なまやさしい、このやりかたを、私は駄目だと言うんではありません。

とまるで夫の弱気を叱咤するマクベス夫人のような態度をとり、完全に夫をリードしている。しかしオールバニー公は、

あなたに対する私の愛情はあついのだが、一方の言い分だけを信じるわけにもいかない。

と極めて公正中立な態度をとる。

ゴネリルはリーガン宛の手紙をオズワルドに託し、リアはケントに託して同じ場所に向かわせる。リアはゴネリルの忘恩の行為をリーガンに訴えるつもりなのだが、道化に、「もう1人の娘さんは似た者同士でご親切になさるでしょうよ」と揶揄される。リアはすでにこの段階で、「あれには悪いことをした」とコーディリアに対する自分の行為を反省する言葉を述べるのである。

グロスター伯の館で、両者の使者である、ケント伯とオズワルドがいざこざをおこし、そこにやって来たコーンウォール公とリーガンはリアの使者であるケント伯を足枷の曝し台にかける。その姿を目にしたリアはリーガンに面会を求めが、拒否される。ようやく出てきたリーガンに姉のひどい仕打ちをなじっているところに、ゴネリルが登場する。

リーガン お供を25人だけにしていただきます。それ以上では部屋もありませんしお世話もいたしかねます。

リア お前たちには何もかも譲ったのに。

リーガン そしてよい時にお譲りになりました。

リア (ゴネリルに) お前と一緒にいくよ。お前は50人というから、25人の倍だ、お前の孝心は妹の2倍だ。

ゴネリル ちょっとお待ちください。
何の必要がございますか、ご家来が25人にせよ、10人にせよ、5人にせよ、屋敷にはその2、3倍の者がおりなんなりとご用をいたしますのに。

リーガン 1人だっていないじゃございませんか。

リアはこの段階ではまだ娘たちの愛情のレベルを受け入れてくれる騎士の数によって計れるものと思っている。彼はまだあの愛情テストで追従の言葉が多いほど自分を愛しているのだと誤解した段階にまだ留まっているのである。50人は25人の倍ではなかったのだ。言葉がその実態を失っていることに彼はま

だ気づいていないのだ。娘にすべて (all) を与えたにもかかわらず、彼の認められた家来の数は「1人だっていない (nothing)」のである。

しかしこれがまだ最悪の事態というわけではない。年老いたリアの王としてのアイデンティティーは徐々に揺さぶられ、完全に崩されてしまった。宵闇がせまり、大風が吹き荒れ嵐が近づいている荒野に、「気が狂いそうだ」といいながら飛び出していくリア。しかし娘たちはそれを止めることもせず、リーガンは「戸締りをよくしなさい」と言う。コーンウォール公も、グロスター伯に、

伯爵、戸締りをよくしなさい。おそろしい晩だ。

リーガンの注意は尤もだ。

と、妻の台詞をくり返し、リーガンが主導権を握っていることをはっきりと示している。しかしゴネリルの夫のオールバニー公はリアやグロスターの虐待には全く手を貸してはいない。

嵐の荒野でのリアの惨状を見るに見かねリアに味方したグロスター伯は、屋敷をとりあげられ、謀反人とされる。

リーガン　すぐさま絞殺するがよい。

ゴネリル　両眼をえぐり取るがよい。

連れてこられたグロスター伯はリーガンによって髭をむしりとられ、コーンウォール公によって、片眼をえぐり取られる。リーガンがもう片方の眼も取れと言ったとき、従者の1人がコーンウォール公を止めに入り殺されるが、彼も傷を負い、それが原因で死ぬことになるのである。グロスター伯は両眼をえぐられ完全に失明し、庶子のエドモンドに敵をとってくれと叫ぶが、リーガンに密告したのはエドモンドだと知らされ、正妻の子であるエドガーは濡れ衣を着せられていたことがわかるのである。

(3) ゴネリルとリーガンのエドマンドをめぐる争い

ゴネリルとリーガンは見事な連携プレーによって、共通の障害であったリアを追放してしまうと、今度は一転して同じ男を求めて熾烈な戦いを展開することになるのである。グロスター伯の庶子エドマンドである。この展開は他の材源にはないものであり、シェイクスピアの創造である。このプロットを導入することで、この劇の中で女性の果たす役割が飛躍的に拡大することになるのである。

コーンウォール公はエドマンドに父親のグロスター伯の処刑の場面を見せないために、ゴネリルが夫のもとに帰る際のエスコートを命じる。その道すがら彼女はエドマンド（父を密告した報奨としてグロスター伯となっている）に愛を告白し、見送りながら次のように嘆く。

ああ同じ男でもこうも違うものかしら、
お前になら、女はどこまでも尽くしたくなる。
うちの阿呆がこの体を横取りしているのよ。

帰ってきたゴネリルにむかってオールバニー公は、リアに対する、妻やリーガンの仕打ちを激しくののしる。

オールバニー 悪魔め、自分の顔を見るがいい。
鬼も素顔はまだしも、女の面をかぶったときほど凄まじくはない。
ゴネリル ばかな阿呆が。

2人がいがみ合っているところに、コーンウォール公の死が伝えられる。オールバニー公はそれを天罰としてうけとめ、眼をくりぬかれたグロスターに同情

をしめす。しかしゴネリルは妹の夫の死に際しても何んの感情も示さず、彼女の関心はただ彼のこの死によってエドモンドと妹の関係、ひいては自分との関係にどう影響を与えるかということではしかない。

(傍白) まんざら悪くもない。

ただ妹が寡婦になり、そして私のエドモンドがそのそばにいるのでは、夢に描いた楼閣も打ち砕かれて、
後には忌まわしい日々が残されるだけ。

リーガンもまた夫の死を悲しんだり、悼んだりする台詞は一言もない。それどころか彼女にとって夫の死はエドモンドとの結婚にはむしろ好都合であり、夫のある姉よりも有利な立場に立ったことを喜んでいるようである。姉の使者オズワルドが持っているエドモンド宛の手紙の中身が知りたくて封を切るように頼み、それが断られると、

私は夫に死なれました。エドモンドと私は話が付いているの。

あの人にとって、つれそうには私のほうが、お前のところの奥方より好都合なのよ。

ゴネリルがオズワルドに託したエドモンドへの手紙は、彼の手にとつたことはなかった。眼をえぐられたグロスター伯に出会ったオズワルドは、これ幸いと命を奪おうとするが、変装したエドガーに殺される。今わの際に、その手紙をエドモンドに渡してくれと頼む。手紙はゴネリルとエドモンドが結婚の約束をしたこと、夫のオールバニー公の殺害を依頼する内容であった。この手紙をエドガーがオールバニー公に渡したことによって、ゴネリルの自殺とエドモンドの死がもたらされるのである。

フランス軍との戦争が始まっている。ゴネリルは厭戦的な夫にあいそをつかし、「こちらは武器の取り替えっから始めなければ、夫には糸巻き棒をわた

します」などと、勇敢に振舞っている様子うかがえる。ここでは伝統的な男性の役割と女性の役割の交代が行われている。しかしゴネリルは一体誰と何のために奮戦しているのだろうか。イギリスをフランス軍の侵略から護るためであろうか。あるいはコーディリアのフランスなどに負けられないという女の意地なのだろうか。あるいは一緒に参戦しているエドモンドに手柄をたててもらふ必要があるためであろうか。オールバニー公は決戦を前にしてこの戦いの大儀名分を明らかにして臨もうとしている。緊迫した状況のなかで、オールバニー公が登場する直前、エドモンドとリーガンの台詞が入る。

リーガン 私、姉であろうと遠慮はしません。お願いだからあの人と親しくしないで。

エドモンド 心配ご無用。おお、姉上と公爵がお見えになった。

ゴネリル いっそ戦いに負けたほうがいい、あの人のことで妹に負ける位なら。

一見、男性と女性の立場が逆転し、あべこべの世界が出現しているように見えるのだが、男まさりと見えるゴネリルの真情は完全に女のものである。国家の最高の権力を握って、外国と戦っている人物が、戦の勝敗よりも、愛人を巡って妹に負けるくらいなら、戦に負けたほうが良いと言うのだから。

オールバニー公はこの決戦を前にして、当然のことながら戦の大儀名分を明らかにしておかなければならないと考えている。しかし彼のこの考え方に対しては三者三様の反応が示される。

オールバニー 王は末娘のもとへ行かれたということだ、わが国の国政に不平をいづく輩と一緒にとのこと。己の信条として、正義を信じ得ぬ戦には勇気がわかぬが、この度のことは我々も決して無視は出来まい、フランスはわが領土を侵略す

るつもりであって、王および、その一党の支持というのは二の次のことであろう、尤も王側もそれなりの理由があって我等を敵とするのだろうが。

エドモンド　　ご立派なお言葉です。
リーガン　　今更、なぜそのような詮議をなさるのです。
ゴネリル　　力を合わせて敵にあたることです。今はそんな内々の些細なことを持ち出すときではありません。

リーガンにとって追い出してしまったリアや、コーディリアの事など聞きたくも無い話であるし、戦に大儀名分が必要であることすら理解していないようである。ゴネリルは使いに出したオズワルドは帰って来ないし、夫や、妹のリーガン殺しさえ企てているので、注意を外に向けておいた方が好都合であり、関心が内輪のことに向けられるのは大いに困ることなのである。エドモンドはさすがに戦には大儀名分が必要であることは解っているのだが、その内容は彼にとってはどうでもよいことなので、適当に調子を合わせているに過ぎない。この短いコメントの中に、3者の思惑が簡潔に、しかし的確に現われている。

エドモンドの最大の関心事は、2人に調子の良いことを言ってしまったことで、どうしようという悩みである。

両手に花か、どちらか1人か、あるいは両方止めにするか。どちらを取っても楽しくはない、両方生きている間は。後家をとれば、姉のゴネリルが怒り狂う、とって、大手を狙っても、あの亭主が生きているかぎり、まず成功はおぼつかない。さてそこで、戦の間はその力を大いに利用し、済んだら、逃げたがっている当の女に手早く邪魔者を片付けさせる工夫をさせるに限る。あの男はリアとコーディリアに慈悲をかけようとするつもりらしいが、戦が終われば、虜の2人、あいつの思惑通り許してたまるか、俺にとって何より大事なのはわが身の無事、理屈の筋では毛頭ない。

この戦いの意味について、シェイクスピアはフランス側の立場もしっかりとコーディリアに語らせている。これよりかなり前の場面、4幕4場、フランス王と結婚し、ずっと登場の機会がなかった彼女が再びイギリスの地をふみ、フランス軍とともに上陸した直後、次の台詞を言うのである。

思いあがった野心にかられ軍をおこすのではないのです、
親を思う子の真情と、お年を召したお父様に王権（right）をもどしてさしあげたい気持ちと、ただそれだけ。

すでにコーディリアの気持ちを知らされている我々には、オールバニー公の戦の大儀名分もいささか色褪せて感じられるばかりでなく、リアの側に対する配慮も感じられ、迫力がないものとなっている。しかし戦争という男性原理のもっとも発揮される場面において、作者はぬかりなく両軍に対する配慮をしている。

（4）ゴネリル、リーガン、コーディリアの死

フランス軍が敗れ、リアとコーディリアは捕虜となり牢屋につながる。2人の今後の扱いに関してエドマンドが意見を述べるが、オールバニー公はそれを彼の越権行為であるとたしなめる。ここで初めてこの国の王権を握っているのが本当は誰であるのかが明らかになってくる。リーガンはその資格は自分が彼に与えたもので、彼はオールバニー公の部下ではないので、越権行為ではないと彼を弁護し、ゴネリルと言い争う。しかしその間にゴネリルの盛った毒が効いてきて気分の悪さを訴える。

リーガン わたしの心の城壁をあなたに明け渡します。
 私はここにあなたを私の夫、私の主人であると宣言します。

ゴネリル つれそうなんて本気じゃないでしょうね。

- オールバニー それを禁止する権利はお前にはない。
- エドモンド 同様にあなたにも無い。
- オールバニー それが私にはあるのだ、脇腹君。
- リーガン (エドモンドに) 太鼓を打たせて、私の身分がそのままあなたのものになったことを皆に知らせるのです。
- オールバニー ならぬ。その訳をきかせよう。エドモンド、お前を反逆罪で捕らえる。(ゴネリルに) うわべを金色に塗らたくった毒蛇もだ。ところで、妹のあなたの要求だが、妻に代わって私から異議を申し立てたい。妻はこの伯爵と再婚の約束をしているのだ。だから私はこれの夫としてあなたの婚約を拒否するのだ。夫が欲しいならいっそ私に申し込んではどうです。妻はもう婚約済みだからな。

正当な権利や法律の支配する世界が支配しはじめる。ここでエドガーが呼び出され、エドモンドと決闘となり、彼を打ち負かして初めて身分を明かす。エドガーがオールバニー公に事前に渡しておいた、署名入りの婚約の手紙を見せられたゴネリルは、「だからどうだと言うのです、法律は私のもの、あなたの自由にはならない、誰が私を訴えられるのです」という。彼女たちの女の論理はいかなる法律をもやすやすと超えられる、いわば超法規の世界に住んでいるのである。これが彼女の最後の台詞となり、リーガンの毒殺を自白し剣で胸を刺して自殺したことが伝えられる。オールバニー公は2人の遺体をその場に運び込ませ、「この天罰に恐れおののくとはいえ、憐れみの気持ちはおきない」と言う。

死の間際に改心したエドモンドが自分とゴネリルが出しておいた、リアとコーディリアの死刑執行を取り消す指令を出すよう求めたその時、リアがコーディリアの遺体を抱えて登場することになる。

シェイクスピアはリアの3人の娘の遺体をすべて同じ舞台に運び入れる。そしてリア自身も、その場で絶命するのである。最後に息を引き取るのは年老い

た父である。コーディリアが生きていると思えば歓喜の余り息絶えたのかどうか、この作者は明らかにしていない。『リア王』の材源はすべて一応リアが王位を回復することになっているので、このような場面はない。そしてテートによる改作ではハッピー・エンドになっているので、当然のことながらこのような凄惨な場面はなく、ゴネリルとリーガンはお互いに食事に毒を盛って死んだとエドガーによって簡単に伝えられるだけである。材源の『リア王年代記』では、ゴネリルの夫であるコーンウォール王が、戦の敗北を認め、「女王（ゴネリル）と一緒にコーンウォールに退却しよう」と言うだけで、彼女の最後にはふれておらず、リーガンについては全く記述がない。その意味ではシェイクスピアはこの3人の娘たちの最後をしっかりと見届けていると言える。特にゴネリルに関しては、自分の死もふくめ、4人の死すべてにかかわっており、さらにエドマンドの死にもかかわっているのである。

ゴネリルとリーガンの死、それはオールバニー公の言うように天罰としての死と言えるかもしれません。しかしそれではそこに同じように横たわっているオフィーリアの遺体をどのように考えたらよいのだろうか。シェイクスピアはその意味を明確に伝えてはいない。いや、悪人も善人も同じように死ぬのだ。悪も亡びたが、善もまた亡びるのだ、現にその舞台の上に4人の遺体をのせているではないか。それが作者の伝えたいメッセージなのだと考えられないわけではない。詩的正義の観点から、それに耐えられなかった多くの人々はテートのハッピー・エンドの改作を150年も観続けたのではなかったのか。

(5) 誰が味方で誰が敵なのか

リアの娘たち、特にゴネリルとリーガンの軌跡をたどりながらリアが放棄した王権の行方をたどってきたが、この劇のほぼ最後、リアが絶命する直前にオールバニー公が次のように言う。

この失意の王をお慰めするためなら、どのような手立てをも講じよう。私

としては直ちに身を引き、ご存命の限り、今より全権力をお預けする。(エドガーとケントに) お2人に対しては、まず旧領をお返しし、さらにこの度の功労に相応しい叙勲、褒賞を行いたい。なお味方はすべてそれぞれの手柄に基づき褒賞にあずかり、敵はすべてそれ相応の苦杯を飲まされよう。

この台詞をリアが聞いているとも、理解しているとも考えられない。しかしここで彼が言っている、敵と味方は具体的には誰をさしているのであろう。彼らイギリス軍はフランス軍と戦っていたはずではなかったのか。そしてコーディリアのフランス軍とそれに味方をしていたリアの一味、ケントやエドガーは完全に敵であったはずである。そしてイギリス軍はフランス軍に勝利し、リアとコーディリアは捕虜となり牢獄につながれたのではなかったのか。しかし勝利したはずのオールバニー公は、リアが生きている限り、権力を預け、さらにケントとエドガーにも褒美を与えるのだと言う。その後、敵と味方にたいして苦杯と褒賞を与えているのだが、敵はイギリス軍で味方はフランス軍になるのであろうか。そうなると戦の前と後では敵と味方が逆転してしまう。あるいはあくまでも敵はフランス軍であり、リアとケントとエドガーだけは味方だということになるのだろうか。

このように考えてみると、リアの3人の娘たちの死の意味の違いがみえてくる。それは単に善人と悪人という区別だけではない別の観かたができるのではないだろうか。フランス軍は敗北し、コーディリアは捕虜になり、ゴネリルとエドマンドの指令により殺された。それは死刑執行の取り消しが遅れたという手違いがあったことを考慮したとしても、フランス王妃としての立場を考えれば明らかに軍事的な意味での死、つまり戦死と考えてよいのではないか。

しかしゴネリルとリーガンの場合はどうであろう。2人は戦争には勝利したのだ。しかし彼女たちにとってフランスとの戦に勝つことよりもっと大事なことがあったのだ。お互いにエドマンドをめぐる相手には負けたくないという姉妹のライバル心、姉妹の心の確執なのだ。戦いには勝ったが、夫であるオー

オルバニー公を殺害出来なかったゴネリルは、先に夫を亡くしている妹のリーガンに対するあせりから、彼女に毒を盛って殺す。そして夫殺しの陰謀とエドモンドとの婚約をしるした署名入りの手紙を見せられ、エドガーとの決闘に敗れたエドモンドを目の当たりにし、自殺する。彼女たちの死は、戦争とは全く関係のない私憤によるいわば情死なのである。

(6) リアの娘たちの特徴

リアがあいまいな形で投げ出した王権は、リア自身を含め多くの人たちの命を奪い、様々なレベルの悲劇を生み出した。しかしコーディリアの命をかけた戦いによってリアの手に戻った瞬間、リアは絶命するのである。シェイクスピアは終始、この王権の推移を考慮しながら芝居を作っていることが窺える。そこで他のすべての材源に倣ってほんの一瞬ではあるけれど、リアの手に王権を戻したのではないだろうか。しかしリア自身は同じ舞台にしながらこのオールバニー公の台詞を聞き、理解するだけの力は残っていなかったのである。しかしオールバニー公のこの台詞は先に述べた敵と味方にたいする曖昧さを残す結果を引き起こしているのではないか。もちろん芝居を観ている観客は、この最後の場面ではリアとオフィーリアに集中しているので、彼のこの台詞の細かい詮索などはしていないであろう。しかしこの芝居の結末がもたらす割り切れなさの原因の一つにこの台詞のもつ曖昧さがあるのではないだろうか。それがまたあのテートの改作『リア王』が150年もの長きにわたって上演され続けた原因の1つになっているのではないだろうか。

リアの娘たち、特にゴネリルとリーガンの軌跡をたどってみると彼女達には著しい特徴があることがわかる。とにかくエネルギーでありバイタリティーに溢れている。自己の行動を振り返って反省することは全くない。自分の欲望に極めて忠実である。そして終始一貫それが変わることがない。その意味では彼女たちの行動は極めて動物的であるといえる。その点ではこの劇に登場する男達とは対照的である。リアはコーディリアを追放したことをすぐに後悔して

いる。ひたすら許しを乞い最後には彼女と和解している。エドモンドでさえ死ぬ前に前非を悔いてエドガーと和解している。グロスターもエドガーと和解し亡くなっている。しかしコーディリアの姉たちは一切の和解を拒否し、自己の欲望の実現に向かって突き進んでいく。

行動的であるので一見男性的に見えるが、外部の規範、道徳、法律といったものは全く考慮せず自己中心的で衝動的であるにすぎない。そういう意味では極めて女性的な特徴を示している。リアが娘たちに求めたのは、道化が「2人の娘を母親代わりに奉る」(1幕3場)と揶揄しているように、自分を優しく包み込んでくれる女の母性であったのかもしれない。しかしそれこそ彼女たちのもっとも欠落している部分だったのである。それどころかリアが演じなければならなかったのは、イエスの遺体を抱く、母マリアのあのピエタ像とは全く逆の、コーディリアの遺体を抱く父リアの、さかさまのピエタ像であった。